

— 1. 和室の実態と居住者の意識 —

○國嶋道子（京都女大）

目的 戦後、わが国では生活の洋風化が進み、住生活の面においても床座から椅子座へ大きく変化してきた。これにともない、住まいにおいて多くを占めていた和室も次第に減少してきているが、和室への愛着は依然として強く、洋風化された生活の中に和室の持つよさを取り込もうとする工夫も見受けられる。そこで、これからの和室のあり方を考え、住宅の設計計画に生かせるよう、和室の雰囲気及ぼす要因分析を行うことを目的として、まず、和室の実態と居住者の意識を調査した。

方法 1戸建て住宅居住者を対象に、現住宅の各居室の実態（広さ、床様式、起居様式、寢床様式など）と意識、床の間や和室に対する意識についてのアンケート調査を行った。また、日本文化の1つである茶道を習っている人々にも調査を行い比較検討した。調査は1995年10月～11月に調査票配布留置方式により実施。1戸建て住宅居住者対象に160配布 137有効回収。茶道教室生対象に159配布 81有効回収。

結果 居室の実態では、主寝室と客間に和室が多くみられた。居間・子供部屋は、洋室が多く椅子座が主流で、子供部屋はベット寝が好まれていた。子供部屋では、室自体は洋室化が進んでいるが、起居様式は床座と椅子座の両方である場合が多く、〈勉強は椅子に座り、遊びは床に座る〉が多かった。床様式、起居様式とも現状に満足しているものが多い。全体に和室に対する意識は高く、愛着も強い。現住宅の和室数が多い人は、今後も必要とする和室数が多かった。また、高齢者のいる家族構成でも必要な和室数が多かった。1戸建て住宅居住者と茶道教室生の意識では、和室を「使う」と「楽しむ」の違いがあった。